

過去との和解

中野 理恵

すぎゆく時をじっくりと慈しむような作品だ。90分間スクリーンに見入ってしまい、終わってもそのまま余韻に浸っていたかった。監督・脚本を手掛けた1928年生まれのラナ・ゴゴベリゼは本作製作時91歳。戦後ジョージアを代表する女性監督である。27年ぶりに本作に取り組んだとのことだが、「みごと！」との言葉が相応しい〈熟作〉である。題名の『金の糸』は日本の伝統技術〈金継ぎ〉に由来し、割れた器を金で修復すると美しく丈夫になる、そのように「過去と和解できた」との思いを込めた、とのことである。

作家のエレネが東欧ジョージア、トビリシの旧市街で娘ナト夫妻と暮らす住まいに、ナトの姑ミランダと一緒に暮らすようになる。ミランダにアルツハイマーの症状が出始めたために引き取ったからだ。実はミランダはソビエト連邦時代（ジョージアは1991年に独立するまでソビエト連邦を構成していた）、政府の高官だったため、エレネは彼女を疎ましく思っていた。同居を始めたミランダは当時をひきずり、ペコペコされるのが好きで、ときにエラソーにふるまう。それを不快に思うエレネ。そこにエレネのかつての恋人アルチルから電話がかかる。数十年ぶりの〈再会〉だ。妻を亡くした彼は電話の向こうで、家族の誰もが忘れていたエレネの79歳の誕生日を祝う言葉を口にするのだった。それ以来、アルチルは時折電話を寄越すようになる。「私たちは年金暮らしのロミオとジュリエット」。ふたりはしみじみと思い出を語り合う。

ある日、エレネは日本の〈金継ぎ〉に触発されたアートを壁に飾り、曾孫のエレネに〈金継ぎ〉の意味について教え、流刑されていた母の思い出も語りながら、おそらく最後になるだろう著作「野の花」を書き進めるのだった。そのような日々を過



©3003 film production, 2019

ごしていたある日、テレビに出演したアルチルを見たミランダが、彼はかつて自分を慕っていた青年だと口走る。それを聞いたエレネはもちろん、不愉快だ。ふたりの間が険悪になり、そして思いもかけない過去の出来事につながっていく…。

ソ連時代を引きずる記憶を背景にして人生の機微を丁寧に描く手法に、熟達した演出の技をみる。ゆったり密やかに流れる音楽も印象深い。作曲を担ったギヤ・カンチェリ（故人）は監督同様ジョージア出身。世界映画史に残るカルト映画の傑作『不思議惑星キン・ザ・ザ』の、ヒトを食ったような音楽と同一人物の手になるとはとても思えない。その多彩さにも思いが至る。なお、ゴゴベリゼ監督の娘サロメも、現在映画監督の道を歩み、何と、監督の母ヌツァも監督であり、その監督作“Uzhmuri”はジョージア初の女性監督作であるが、彼女は1937年のスターリンによる大粛清の犠牲となり、寒冷地の強制収容所に10年間も流刑され、解放後は二度と映画を撮らなかったとのことだ。

ところで、この原稿を入稿する直前、今夏をもっての岩波ホール閉館のニュースがもたらされた。残念でならない。

《Cinema Information》

『金の糸』

ジョージア・フランス映画(91分)／監督：ラナ・ゴゴベリゼ／2月26日(土)より岩波ホールほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』（現代書館、2018）等。